

本町二十丁目出土の伏見人形土型

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

調査の概要 東山区本町二十丁目は、本町通と十条通の交差点周辺にあたります。伏見稲荷大社門前付近から九条通にかけての本町通沿いには、かつて数多くの伏見人形の窯元が軒を連ねていました。

2011年1月から3月にかけてJR奈良線と本町通に挟まれた場所で、十条通拡幅工事ともなう発掘調査を行なったところ、伏見人形を焼成した窯跡が見つかりました。また、伏見人形の製作に使用された原型や土型が多量に出土しました。

出土した原型 原型は人形の形の基になるものです。きめの細かい陶土で作られており、10点ほどが出土しました。いずれも一部が欠けていますが、天神・女物・かまど・土面子などがあります。

天神の胴部(原型)



土型の種類 土型にはさまざまな種類があります。

天神は衣冠束帯の威儀を正した姿で、座像と立像があります。七福神は大黒・恵比寿・布袋・福祿寿があります。大黒は小槌や俵、恵比寿は鯛と組み合わされ、富貴



恵比寿

のまじないとなります。布袋は火除けのまじないで、かつては初午の日に小さなものから順に年々買い求め、7年または13年で満願となりました。また、稲荷神への信仰に関わる狐(眷属さん)や鳥居・神輿・狛犬があります。

狐



まんじゅうく
饅頭喰いは伏見人形を代表する

モチーフで、「父と母とどちらが好きか？」と尋ねられた子どもが、手に持った饅頭を二つに割り「どちらが美味いか？」と言いつつ返した教訓に基づいており、子どもに恵が授かるといわれています。

福助は幸運のまじない、平安時代後期の歌人である西行法師は盗



饅頭喰い

難除けのまじないとなりました。虚無僧は禅宗の一派の半俗僧で船酔いのまじないです。淀川を往来する三十石船の乗客に買い求められました。友引人形は五体の子どもが並んだ形をしており、死者のために棺に納めました。

友引人形



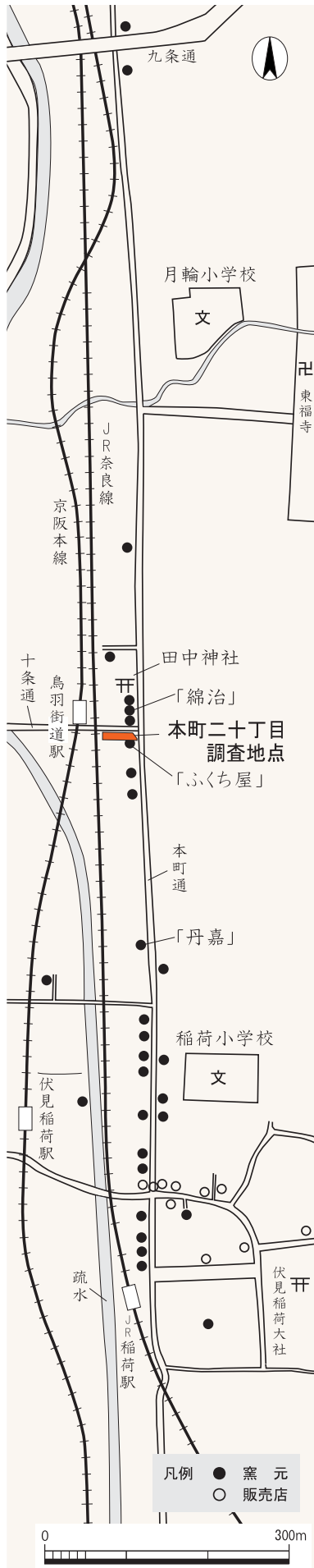
力士はまわしを締めた裸形で頭は大銀杏を結っています。女性をかたどった女物は、着物姿で少し



虚無僧



女物



明治時代から昭和初期の窯元と販売店

腰をひねっています。土型では坊主頭ですが、製品には鬘が貼り付けられました。愛らしい童子物は団扇を手に持ったり、瓢箪に跨ったりした躍動的な姿をしています。



童子物

動物には犬・猫・ねずみ・うさぎ・馬・牛・にわとり・鳩・魚・蛇などがあります。首に布を巻いているのはペットであることを表しています。また、耳や足が土型にならないものがありますが、土型で表現が難しい細かい部分は成形の段階で継ぎ足されました。



犬



にわとり

器物には蔵・舟・橋・かまど・太鼓・神楽鈴・小判・巾着などがあります。その他に柚でんぼ・皿などの容器、土面子などの玩具があります。



蔵

土型の特徴 土型は原型に陶土を押し当てて作ります。外面には原型に陶土を押しえ付けた指の痕が残されています。内面には、きめの細かい陶土が使用されていますが、土型の破片の断面をみると、土を継ぎ足すために櫛状の工具で刻目をつける掻き破り痕が残っているものがあり、土型の内側と外側で陶土を使い分けていたようです。縁の部分は、製作工程ではみ出した陶土をヘラで掻き落とすため、磨り減って滑らかになっています。また、割れた土型を漆で継いだものがあり、大事に使用されていたことがわかります。

土型の中には、外面に年号や屋号のヘラ描きをもつものがあります。年号は寛政7年(1795)から明治18年(1885)までのものがあり、出土した土型が江戸時代後期から明治時代に作られたことがわかります。屋号は窯元の一つ「綿治」を表すものです。「綿治」は戦前まで操業していました。

まとめ 本町二十丁目の調査地点には、伏見人形の窯元の一つ「ふくち屋」がありました。これまで伏見人形は伝世品を中心に研究がすすめられてきましたが、今回の調査により、焼成窯や原型・土型から考古学的研究が可能となりました。(山本雅和)